

第 105 回日本精神神経学会総会

シンポジウム

従来のストレート研修のメリット・デメリット

中前 貴^{1,6)}，猪狩 圭介^{2,6)}，加藤 隆弘^{3,6)}，田中 徹平^{4,6)}，中野 和歌子^{5,6)}

- 1) 京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学，2) 国立病院機構肥前精神医療センター，
3) 九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野，4) 自衛隊佐世保病院，
5) 産業医科大学大学院精神医学教室，6) NPO 法人日本若手精神科医の会

新旧卒後研修制度における精神科教育の最大の差異は、従来のストレート研修においては、精神科医 1 年目が医師としても 1 年目である一方で、新臨床研修制度においては、精神科医 1 年目は医師としては 3 年目にあたることではないであろうか。また、新臨床研修制度の後期研修においては、常に人手不足で苦む各教育機関では特に、後期研修医が精神科医としてのキャリアが浅いにもかかわらず、医師としてのキャリアが長いことを過剰に評価し、十分な精神科教育を施さないうちに、早期から即戦力として診療を任せられる傾向があるのではないかと考えられる。このことは、特に外来教育において、外来陪席の期間や、どの時期から外来診療を任せるといった事柄に如実に表れている。精神科医にとって、精神科面接は身体科における各種手技に相当する、非常に重要な技術である。しかし、一旦外来診療を任せられるポジションになってしまうと、実際に他の医師の診察場

面を見て学ぶ機会は急激に減少する。すなわち、外来診療を開始する前に、指導医の外来診察を陪席することは、精神科医にとって、唯一の外来教育をうけるチャンスであり、大変貴重なものである。新臨床研修制度では上記の理由において、十分な外来教育をうけることができず、早期から外来診療を任せられるのに比べ、従来のストレート研修では、外来陪席の期間をより長く確保できる点がメリットとしてあげられる。しかし、その一方で、従来のストレート研修を受けた医師の中には、外来陪席の期間が長く、裁量権を与えられない立場に長期間甘んじることをデメリットと感じる者がいたことも確かである。当日は、従来のストレート研修を経験した最後の世代にあたる演者自身の経験を交えて、そのメリットとデメリットを報告し、外来教育を中心に今後の卒後研修制度への提言を行った。

(この論文は抄録集より転載しました)